

# よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



3

よろこびの知らせ  
第3集

目 次

神の愛 .....	1
ヨナ 4:5-11	
契約の愛 .....	10
ホセア 2:16-20	
イスラエルの滅亡 .....	19
列王記第二 17:13-15	
キリストの預言 .....	28
イザヤ 53:4-5	

ここに収められたのは、2019年9～10月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれています。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

# 神の愛

## ヨナ 4:5-11

4:5 ヨナは町から出て、町の東の方にすわり、そこに自分で仮小屋を作り、町の中で何が起こるかを見きわめようと、その陰の下にすわっていた。

4:6 神である主は一本のとうごまを備え、それをヨナの上をおおるように生えさせ、彼の頭の上の陰として、ヨナの不きげんを直そうとされた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。

4:7 しかし、神は、翌日の夜明けに、一匹の虫を備えられた。虫がそのとうごまをかんだので、とうごまは枯れた。

4:8 太陽が上ったとき、神は焼けつくような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は衰え果て、自分の死を願って言った。「私は生きているより死んだほうがましだ。」

4:9 すると、神はヨナに仰せられた。「このとうごまのために、あなたは当然のこのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」

4:10 主は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。

4:11 まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」

### 一、ヨナの預言

ヨナのストーリーは子どもたちが好きなお話のトップテンに入るでしょう。けれども、ヨナはたんなる物語のキャラクターではなく、歴史上の人物で、「ヨナ書」はたんなる物語ではなく、神からのメッセージ、大切な真理を明らかにしている「預言」の書です。

聖書でヨナの名前が最初に出てくるのは列王記第二 14:23-25です。こう書かれています。「ユダの王ヨアシュの子アマツヤの第十五年に、イスラエルの王ヨアシュの子ヤロブアムが王となり、サマリアで四十一年間、王で

あった。彼は主の目に悪であることを行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムのすべての罪から離れなかった。彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェル出身の預言者、アミタイの子ヨナを通して語られたことばのとおりであった。」イスラエルでは、エフーがアハズの子ヨラムと母親のイゼベルを滅ぼして王となり、その後、その子孫、エホアハズ、ヨアシユ、ヤロブアムが王となりました。ソロモンの死後、北王国を作ったのも同じ名のヤロブアムですので、こちらのヤロブアムは「ヤロブアム二世」と呼ばれます。ヨナは、おそらくヤロブアム二世の宮廷預言者のような立場にあったのではないかと思われます。

主は、このヨナにニネベに行くようにお命じになりました。ニネベはティグリス川の上流にあり、アッシリアの首都でした。アッシリアはソロモンの死後、イスラエルが南北に分かれたころからまわりの国々を征服して大きくなり、イスラエルやユダにもその手を伸ばしていました。イスラエルから見れば敵国のニネベに行き、ニネベのために預言するなど、ヨナにとっては我慢のならないことでした。ニネベには陸路を使って東に向かうのですが、ヨナは港から船に乗って西へと、まったく逆の方向に向かいました。ヨナは、主の預言者でありながら、公然と主の命令に逆らったのです。

そのためヨナの乗った船は嵐に遭いました。乗組員も乗客もこの嵐を乗り切ろうと懸命になっていたのに、ヨナはひとり船底で眠っていました。ヨナは自分のせいで

嵐が来たことを知っていたので、自分を海に投げ込むように人々に言い、人々はやむなくそうしました。ヨナは海の深みに沈みましたが、主が備えた大きな魚に飲まれ、その中で生き延び、無事に陸に戻りました。

ヨナは結局ニネベに行って預言することになったのですが、ヨナが伝えたのは「四十日するとニネベは滅ぼされる」という言葉だけでした。ニネベの町は行き巡るのに三日かかるほどの大きな町ですが、ヨナは、たった一日しかニネベの町で預言してません。それにもかかわらず、ヨナの言葉を聞いたニネベの人々は、王からはじまって、身分の高い者も低いものも、家畜までもが、灰をかぶり、荒布をまとい、断食し、悔い改めました。

歴史の記録によるとアッシリア王アダド・ニラリのとときアッシリアの改革が行われ、アダド・ニラリに続く三人の王の間、アッシリヤの征服政策が中断されたことが知られています。それは、ヤロブアム二世がイスラエルを治めていた時（786-746 B.C.）と一致します。ヨナのニネベでの預言がアッシリアの政策を変え、イスラエルはアッシリアの圧迫から救われて、失った領土を取り戻すことができたのです。列王記第二 14:25に「彼（ヤロブアム）は、…イスラエルの領土を回復した。それは、…ヨナを通して語られたことばのとおりであった」とあるように、ヨナ書に書かれていることは歴史の事実なのです。

## 二、ヨナの不満

ヨナの預言は当時の世界に平和をもたらしたのでですから、ヨナは満足して当然でした。ところが、ヨナは不満

でした。ニネベの人々が悔い改めて、その町が滅ぼされないでいるのに我慢がならなかったのです。ヨナは、自分が預言したように四十日してニネベが滅びてしまえばよいと思っていました。それで、主がニネベの町を滅ぼすのを見届けようと、町を一望できる場所に小屋を作ってニネベの町を見張っていました。ニネベの廃墟には今でも高さ30メートルほどの「ヨナの丘」と呼ばれるところがあり、それがヨナが小屋を建てたところだと言われています。

主はヨナが建てた小屋のそばに「トウゴマ」を生えさせました。トウゴマは「ヒマ」とも言い、この種から「ヒマシ油」を作ります。3メートルほどの高さになり、手のひらの何倍もある大きな葉を持っています。ですから、トウゴマはヨナの小屋に涼しい日陰を作ってくれたのです。それでヨナは、トウゴマをととても喜びました。ところが、翌朝、起きてみると、トウゴマは虫に噛まれ、枯れてしまっていました。日が高くなると、焼けつくような東風がヨナを襲いました。

すると、ヨナは痲痺をおこして言いました。「私は生きているより死んだほうがましだ。」ヨナは、先には、わがままな子どものように、主の命令に逆らいましたが、ここでは、駄々っ子のように、不満をまき散らしています。怒りの感情に捕らえられていたのです。「怒り」のすべてが悪いわけではありません。正しくないことに対する「怒り」は正義を保つ防波堤になります。しかし、聖書は「怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません」（エペソ4:26）と教えています。たとえそれが「正義の怒り」で

あったとしても、怒りが「憎しみ」となり、罪となることが多いからです。それが正しいか間違っているかに関係なく、自分の気にいらなことがあると、怒りの感情で反応するということがあります。そうした態度を改めないでいると、大きなトラブルを招くことになります。最近、私は、“A bad attitude is like a flat tire. If you don't change it, you'll never go anywhere.”（悪い態度はパンクしたタイヤのようなものだ。取り替えないかぎりどこへも行けない。）という言葉を目にしました。怒りは正しく取り扱われなければなりません。けれども、それは自分の力では出来ないのです。私たちは皆、主によって教え諭され、助けられる必要があります。

それで主はヨナに言われました。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜んでいる。まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」主は、怒りの感情に捕らわれていたヨナに、きわめて単純な真理を示されました。「一本のトウゴマよりも十二万人の人々のほうが大切である。」怒りに捕らわれると、あたりまえのことが見えなくなってしまうのです。イエスはこう言われました。「きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。」（マタイ 7:30）主は、トウゴマをはじめ野の草の一本一本にいたるまで、その上にいつくしみを注いでくださっています。そうであるなら、それに勝って私たち

人間を愛し、あわれみ、心にかけてくださらないはずがありません。主が、主の前に悔い改めているニネベの十二万の人々をあわれまれるのは当然のことなのです。

ヨナは典型的なイスラエル人でした。イスラエルを思う「愛国者」だったでしょう。しかし、そのために、神の愛を狭く考えていました。主の愛はイスラエルにだけ向けられており、他の国々は神の怒りの対象でしかないと考えていたようです。しかし、ヨナは、イスラエルだけが正しいのではない。異邦人だけが罪深いのもないことを学びました。イスラエルの人々は、自分たちは神に選ばれた者だという誇りを強く持っていました。確かに、イスラエルは神に選ばれた国でした。けれども、それは、イスラエルが優れていて、他の国々が劣っているからではありませんでした。イスラエルが選ばれたのは、カナンの地で寄留者であり、エジプトで奴隷であった人々を、主があわれんでくださったからです。ですから、イスラエルは神の選びを喜び、感謝することはできても、そのゆえに他を見下すことはできなかったのです。ところが神の民は誤った「選民意識」を持ち、神の恵みをひとり占めして、それを他の国々にあかしすることを忘れてしまいました。主は、ヨナに、そしてイスラエルの人々に、ご自分の大きく、広い愛を教え、神と人々に対する間違った態度を改めさせようとなされたのです。

### 三、ヨナの悔い改め

「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。まし



て、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるのではないか。」ヨナ書はこの主の呼びかけで終わっています。これに対するヨナの返事はありません。いくらわがままなヨナでも、この言葉には反論できなかつたのでしょうか。おそらく、この言葉を聞いたとき、ヨナは、主に審かれなければならないのは、ニネベの人々ではなく、自分なのだということに気付いたのだと思います。

ヨナは、悔い改めたニネベの人々を主があわれんでおられることに怒っていましたが、主の言葉によって、自分もまた悔い改めを必要とする罪びとであることを身にしみて分かりました。列王記第二 14:25 では、ヨナは「主のしもべ」と呼ばれています。すこしも「主のしもべ」らしくなかつたヨナが、その後、主に取り扱われ、変えられていったことが分かります。人は、真実に悔い改めることで、聖霊の働きを受け、古い性質からきよめられ、新しい人になることができるのです。

罪が分かるというのは、一般的に、「世の中は悪い」、「人間には罪がある」ということを認めるだけのことではありません。他の誰でもない、この私が罪びとなのだということを知って、はじめて「罪」が分かります。そして自分の罪を心から悔い改め、主のあわれみを求め、その罪から救われるとき、主の恵み、あわれみがどんなに、広く、深いものかが分かるようになるのです。

話は 18 世紀の英国に飛びますが、ジョン・ニュートンは、船長であつた父親に従つて船員となり、奴隷の輸送

船に乗って働いていました。そのころの彼の生活は酒やギャンブルに浸った、荒れたものでした。しかし、彼は、本気になってその罪を悔い改めました。彼は船員を辞め、1755年に聖職者への道を歩みはじめ、1764年、39歳の時に英国教会の司祭となりました。当時、イギリスは奴隷貿易で利益をあげていたのですが、1788年、ニュートンは『奴隷貿易について思う』というパンフレットを出版し、かつて奴隷貿易に船員として関わった自身の罪を告白し、奴隷貿易の非人道性を訴えました。これは、奴隷貿易の廃止のために働いた若き国会議員ウィリアム・ウイルバーフォースを励ますものとなりました。ウイルバーフォースが提出した奴隷貿易禁止の法律は、1807年に成立しましたが、ジョン・ニュートンはその成立を見届けてから、その年の12月に世を去りました。

讃美歌 “Amazing Grace”は、1772年に、このニュートンによって書かれました。その第一節目はこうです。

Amazing grace! How sweet the sound  
That saved a wretch like me.  
I once was lost, but now am found,  
Was blind but now I see.

ニュートンは自分を “wretch” と呼んでいます。これには「悪党」「人でなし」という意味があります。ニュートンはそんな言葉を使ってまで、自分の罪を徹底して悔い改めたのです。そして、そんな自分にも、神の恵みが注がれていことに感動して、“Amazing grace”という言葉で、その賛美を始めたのです。自分の罪の深さを知る者

だけが、神の恵みの高さに感動することができるのです。

ヨナ書は、イスラエルの敵であったニネベの人々さえも愛してくださった主の大きな愛を教えてください。また、わがままで、反抗的で、気まぐれなヨナに忍耐のかぎりを尽くし、教え、諭してくださった主の深い愛をも教えてください。聖書は言います。「主は、…あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」（ペテロ第二 3:9）私たちは皆、この主の忍耐とあわれみによって救われました。この愛をさらに知り、ほめたたえ、そして、人々にあかししていきたいと思います。

### （祈り）

父なる神様、ヨナの物語を通して、あなたの愛の広さと深さを教えていただき感謝します。あなたの愛によって、私たちは真実な悔い改めに導かれ、悔い改めを通して、さらにあなたの愛を知ることができました。私があるあなたの愛を受けているなら、他の人はなおのことです。あなたの愛をより強く確信して、「主はあなたを愛しておられる」と人々に知らせることのできる私たちとしてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

## 契約の愛

ホセア 2:16-20

- 2:16 その日、——主の御告げ。——あなたはわたしを『私の夫』と呼び、もう、わたしを『私のバアル』とは呼ばない。
- 2:17 わたしはバアルたちの名を彼女の口から取り除く。その名はもう覚えられることはない。
- 2:18 その日、わたしは彼らのために、野の獣、空の鳥、地をはうものと契約を結び、弓と剣と戦いを地から絶やし、彼らを安らかに休ませる。
- 2:19 わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。
- 2:20 わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。このとき、あなたは主を知ろう。

### 一、神の契約

聖書には「契約」という概念があります。「契約」と聞くと、私たちは保険などの証書の裏に細かい字で書かかれている文章を思い起こし、うんざりするかもしれません。アメリカではどこに行っても、何枚もの書類を渡されて、ここにサインしろと言われます。ほとんどの場合、よく読まないで、言われるままにサインすることが多いと思いますが、そうした書類もまた「契約」の一種で、サインした以上、あとで文句を言えないようになっています。

契約書の多くはそれを作った側が自分たちを守るために作成されることが多いように思います。保険の契約にしても、様々な例外の事項が長々と書いてあって、いざという時、補償してもらえないこともあります。また、雇用契約でも、給与や恩典についての取り決めの後、

「この契約は雇い主の側で一方向的に破棄できる」などと書かれていて、出勤したとたんに「あなたはレイオフされました」と言われることもあるのです。

しかし、神の契約は違います。神は、ご自分を守るために契約を作られたのではありません。むしろ、私たちが神に要求することができるため、またその権利を保証するために契約を作られたのです。神は主権者ですから、人間に命令を与えることはあっても、約束を与える必要はないのです。私たちは、神が命じられたことを行って当然で、私たちには、どんな報いも神に要求する権利はないのです。しかし、神は人間を愛し、人間を奴隷としてではなく、ご自分の子どもとして扱ってくださり、神に従う者に報いと祝福を約束してくださいました。そして、その約束の言葉を聖書という書類に作成し、イエス・キリストの十字架の血でサインをし、福音のメッセージを通しておおやけに宣言しておられるのです。神の言葉は、それ自体、変わらない、力あるものなのですが、神は契約によって、それをさらに確実なものとされました。もし神が信じて従う者に報いや祝福を与えなかったら、その契約をたてにとつて、神を訴えてもよいとさえ言うておられるのです。

そのことは神とアブラハムとの契約に表れています。神はアブラハムを選び、彼を祝福し、神の民の先祖とすると約束されました。アブラハムとの契約はその子イサクに、そしてイサクの子ヤコブへと引き継がれました。このヤコブには双子の兄弟エサウがいました。ほんらい

はエサウがイサクから長子の特権とともにこの契約を受け継ぐはずだったのですが、彼は霊的なことがらに無頓着で、結局は長子の特権と祝福をヤコブに奪われてしまいました。長子の特権を奪ったヤコブはエサウの怒りを避け、叔父のところ、遠い外国に逃れました。叔父の家でヤコブは結婚し、数多くの子どもと財産を得ました。この事は創世記 27～30 章に書かれています。

年月が過ぎて、ヤコブは故郷に帰ることになるのですが、エサウが四百人を引き連れてヤコブを迎えようとしているということを聞きました。ヤコブは家族やしもべたち、また家畜の群れを先に行かせた後ひとり留まっていた。ヤコブにはエサウに対する後ろめたさがあり、また彼への恐れもありました。それで、ヤコブは神の助けを願い求めて、ひとり、必死になって祈りました。その祈りは神との格闘のような祈りだったのですが、ヤコブはそのとき実際の格闘も体験しました。誰もいないはずのところにひとりの人がやってきて、その人は暗闇の中でヤコブと格闘を始めました。その人は「わたしを去らせよ。夜が明けるから」と言いましたが、ヤコブは「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらないければ」としつこく迫りました。「その人」とは、人の姿で現れた主ご自身でした。ヤコブは神と格闘し、神に祝福を求めたのでした。その祝福とは、神がアブラハムに約束された祝福のことです。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらないければ」とは、ヤコブが自分ひとりの安全を願った言葉ではなく、アブラハムか

らイサクに、そして今、彼が引き継いでいる契約に基づく祝福を願い求めたものでした。ヤコブは契約に基づいて神に訴え、神もまた、その契約に従ってヤコブに報いてくださいました。神はエサウの怒りを解き、ヤコブはエサウに温かく迎え入れられたのです（創世記 32～33 章）。

この後、ヤコブの子孫イスラエルが苦しみに遭うたびに、神はご自分を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼んで、ご自身が、アブラハム、イサク、ヤコブたち、イスラエルの父祖たちと結んだ祝福の契約を忠実に守るお方であることを示し続けてくださいました。とくに、神がイスラエルをエジプトから救い出されたのは、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を覚えておられたからだと言っています。出エジプト 2:23～25 にこうあります。「それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた。神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの子らをご覧になった。神は彼らを見こころに留められた。」

## 二、愛の契約

神は、エジプトから救い出したイスラエルとの間に「わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」（レビ 26:12）という契約をお立てになりました。ところが、イスラエルはこの契約を踏みにじり、主を捨て、偶像の神々を拝む者となりました。預言者ホ

セアは、そんなイスラエルに最初の契約に立ち返れと呼びかけたのです。

ホセアの時代、イスラエルでは相変わらずバアル崇拜が盛んでした。「バアル」という言葉には「主」

（“Lord”）という意味があって、偶像を「バアル」と呼ぶことは、まことの主である神に逆らうことだったのです。また、「バアル」には「主人」（“Master”）という意味もあり、この言葉は、日本語で「私の夫が…」と言うところを「私の主人が…」と言うように、「夫」を指す言葉でもありました。イスラエルがまことの神を捨て、バアルを「私の夫」と呼ぶのは、イスラエルをご自分の妻のようにして愛してくださった神への裏切りでした。そんなイスラエルは神から見捨てられて当然なのですが、神は不貞の妻イスラエルをなお愛して、彼女をご自分のもとに戻ってくるのを待っておられたのです。「神とイスラエルとの契約は、冷たい法律的な契約ではなく、愛の契約である。神はその変わらない愛をもって、なおもイスラエルを愛し、彼女に真実を尽くしておられる。イスラエルが神に立ち返るなら、この愛の契約が再び確かなものになる。」ホセアはそう預言したのです。

「…あなたはわたしを『私の夫』と呼び、もう、わたしを『私のバアル』とは呼ばまい。…」（16、17）というのは、イスラエルがまことの神に立ち返り、愛を込めて神を「わが主」と呼ぶようになることを言っています。「その日、わたしは…弓と剣と戦いを地から絶やし、彼らを安らかに休ませる」（18）というのは、イスラエル



が滅亡から救われることを言っています。「わたしはあなたと…契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。…」(19、20) この言葉は神の契約が、愛の契約であることを物語っています。

ホセアは、神の愛を言葉だけでなく、その実生活を通して語りました。じつはホセアの妻ゴメルはホセアと三人の子どもを捨てて他の男性のもとに行き、ホセアを裏切ったのです。ところがゴメルはその男性からも捨てられ、奴隷に売られてしまいました。ホセアは代価を払ってゴメルを買い戻し、ふたたび妻として迎えました。ホセアは、自分の身に起こった不幸な出来事を通してでしたが、イスラエルの回復を願ってやまない神の愛を深く理解し、神からの言葉を語り伝えたのです。

ホセアの預言は、新約の時代に、イエス・キリストによって成就しました。キリストは「花嫁」である教会、つまり、キリストを信じる者たちの「花婿」となってくださいました。けれども、キリストを信じる者たちは、キリストの花嫁となるのにふさわしかったので選ばれたわけではありません。信仰者もまた、イエス・キリストのもとに来るまでは、まことの神に背を向け、その愛を踏みにじていました。そして、罪の奴隷となっていました。そんな私たちをキリストはご自分の命という代価で買い取って「神の民」とし、ご自分と私たちの間に愛の契約を立てくださったのです。キリストの愛は、この契約によって揺るがないものとなりました。「どんな被造

物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、  
私たちを引き離すことはできない」（ローマ 8:39）ので  
す。

### 三、恵みの契約

聖書は、この神の契約の書物です。聖書は「旧約」と  
「新約」に分かれています。 「旧約」「新約」の  
「約」は「契約」の「約」です。この「約」には英語で  
は “Testament” という言葉が使われます。これはヘブル  
9:16-17で「遺言」と訳されています。そこには「遺言は、  
人が死んだとき初めて有効になる」と書かれていますが、  
それは、神の救いの契約がイエス・キリストの十字架の  
死によって成り立っていることを言っています。遺言は、  
それを作った人が亡くなってはじめて、効力を発します。  
同じように、イエス・キリストによる救いの契約も、キ  
リストの死によってはじめて私たちのものとなるのです。

他の契約、たとえば、保険であれば、保険料を払って  
いなければ、何も受け取ることができません。ところが、  
「遺言」という契約では、遺産を受け取る側には何も求  
められないのです。ただ受け取るだけでいいのです。私  
たちの救いにおいても同じです。私たちが救われるため  
のすべてのことはイエス・キリストが成し遂げてくだ  
さっています。私たちがすることは、キリストの救いの  
遺産を信仰によって受け取るだけなのです。イエス・キ  
リストによる救いの契約は、まさに「恵みの契約」です。

皆さんの親戚に大富豪がいたとして、その人が亡くな  
り、遺言によって皆さんに大きな遺産が分配されると

いう知らせが来たら、皆さんはどうしますか。その知らせを聞いて、「そんなはずはない」と疑いますか。そんなものはいらないと断りますか。あとで受け取りますからといって、ほうっておきますか。いいえ、ほとんどの人は、すぐに手続きを済ませ、それを受け取るでしょう。イエス・キリストの救いも同じではないでしょうか。聖書は、「今は恵みの時、今は救いの日です」（コリント第二6:2）と言って、キリストが遺してくださった恵みの契約を、「今」受け取りなさいと勧めています。

ホセアもまた、同じ時代の人々に神の愛と恵みの契約を今、受け取るようにと呼びかけました。神は言われます。「わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。」ここに、神の契約について四つの言葉が使われています。「永遠」、「正義と公義」、「恵みとあわれみ」、そして「真実」です。神の契約は、時間が経っても変わらない「永遠の」契約です。それは、その契約にとどまる人々に「正義と公義」をもたらします。それは、神に背いて離れていった人々にさえも差し出されている「恵みとあわれみ」の契約です。神の愛は、人の愛とは違って気まぐれな愛ではありません。神の愛は真実な愛で、「契約の愛」と呼ばれます。神は、ご自分と私たちとの間に契約を立て、それによって、ご自分の愛の真実を確かなものにしてくださいました。何者にも縛られない自由な神が、契約によってご自分を縛るほどに、私たちを愛して下さって

いるのです。神の契約は「真実」な契約であって、その契約に頼る者は決して裏切られることはないのです。

ホセア 2:20 は、「このとき、あなたは主を知ろう」という言葉で終わっています。この神との愛の契約に結ばれるとき、私たちは「主を知る」ことができるからです。わたしの神、わたしの父、わたしを愛しておられるお方として、神を知るのです。「主を知ること」、これこそ私たちの霊と魂が求めてやまないものです。神は、遠くから観察して知ることができるようなお方ではありません。私たちが神の愛を受け入れるとき、また、神の愛のもとに立ち返るとき、そこでこそ、私たちは「主を知る」のです。神の愛の契約に結ばれ、真実な主の愛をさらに確信させていただきましょう。

### (祈り)

真実な愛で私たちを愛し続けてくださる主なる神さま。私たちをあなたの愛のうちへと導いてください。あなたの確かな愛の契約の中に私たちをとどめてください。あなたに愛され、あなたを愛する中で、さらにあなたを知る者としてください。イエス・キリストのお名前です。祈ります。

# イスラエルの滅亡

## 列王記第二 17:13-15

17:13 主はすべての預言者とすべての先見者を通して、イスラエルとユダとに次のように警告して仰せられた。「あなたがたは悪の道から立ち返れ。わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、また、わたしのしもべである預言者たちを通して、あなたがたに伝えた律法全体に従って、わたしの命令とおきてとを守れ。」

17:14 しかし、彼らはこれを聞き入れず、彼らの神、主を信じなかった彼らの先祖たちよりも、うなじのこわい者となった。

17:15 彼らは主のおきてと、彼らの先祖たちと結ばれた主の契約と、彼らに与えられた主の警告とをさげすみ、むなししいものに従って歩んだので、自分たちもむなししいものとなり、主が、ならってはならないと命じられた周囲の異邦人にならって歩んだ。

### 一、イスラエルが辿った道

きょうのメッセージのタイトルは「イスラエルの滅亡」という、まったくうれしくないものです。イスラエルは、エジプトで奴隷となって苦しんでいたとき、主が、彼らの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブと結んでくださった契約のゆえに、あわれんで救ってくださった人々です。アブラハム、イサク、ヤコブと契約を結んでくださった主は、ダビデとも契約を結び、ダビデの子孫が長くイスラエルを平和のうちに治めると約束してくださいました。

その約束の通り、ダビデの子、ソロモンの時代にはイスラエルは平和と繁栄を楽しんだのですが、ソロモンの死後、ソロモンの家来ヤロブアムが反逆し、イスラエルの十二部族のうち十部族がサマリヤを首都とする「北王国イスラエル」を作りました。ソロモンの子レハブアム

に残されたのはユダ族とベニヤミン族の二部族だけで、これは「南王国ユダ」と呼ばれるようになりました。

南王国ユダはエルサレムに主の宮を持ち、まことの神への信仰を保っていましたが、北王国イスラエルでは、人々がバアルなどの異教の神々を拝みました。アハブ王の妻イゼベルが、王妃だった20年間の間にバアル崇拝を広め、夫が亡くなったあとも、息子ヨラムの王母として12年間バアル礼拝を盛んにしたのです。

北王国イスラエルはその後ヤロブアム二世のときに少し国力を回復しましたが、アッシリヤにテグラテピレセルという強力な王がおこり、イスラエルを圧迫し、イスラエルに貢物を納めさせました。イスラエルがエジプトを頼ってアッシリヤに背いたので、テグラテピレセルの後にアッシリヤの王となったシャルマヌエセルはサマリヤを包囲し、ついに紀元前722年、サマリヤが陥落し、北王国イスラエルはおおよそ200年の歴史を閉じたのです。

## 二、イスラエル滅亡の理由

なぜイスラエルは滅びたのでしょうか。聖書はその理由について、こう言っています。「こうなったのは、イスラエルの人々が、彼らをエジプトの地から連れ上り、エジプトの王パロの支配下から解放した彼らの神、主に対して罪を犯し、ほかの神々を恐れ、主がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人の風習、イスラエルの王たちが取り入れた風習に従って歩んだからである。」

(列王記第二 17:7-8)

主は、エジプトから救い出したご自分の民を、「約束の地」に導き入れましたが、そこにはすでに先住民がいて、その先住民は宗教的にも道徳的にも、悪に染まっていました。それで主は「あなたは彼らの神々を拝んではならない。仕えてはならない。また、彼らの風習にならなくてはならない」（出エジプト 23:24）と警告されたのです。けれども彼らはその警告に耳を貸しませんでした。

主は「十戒」の最初で「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」（出エジプト 20:2-3）と言っておられます。この言葉は、「わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」という契約の言葉として繰り返されています（出エジプト 6:7、レビ記 26:12、エレミヤ 7:23、11:4、30:22、エゼキエル 36:28）。全世界、いや、全宇宙の神である主が、イスラエルを選んで「わたしはあなたの神」、「あなたはわたしのもの」と言われたのです。イスラエルにとって、これ以上に恵み深く、力強い言葉があるでしょうか。主は、イザヤ 43:1-4で、こう言っておられます。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イ

スラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしは、エジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。…」日本語で「たとえ火の中、水の中」という言葉がありますが、まさに、主は、ご自分のものとしたイスラエルを愛して、火の中、水の中でも共にいて救うと約束しておられるのです。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」と言って、主は神の民を愛されました。神の民となるというのは、この主の愛を受け入れ、それに答えることです。信仰とは、主なる神との愛の関係の中に生きることです。それは、聖書だけが教えていることで、他の宗教には、とりわけ、イスラエルを取り囲んでいた国々の宗教が決して教えることがなかったものです。

なぜなら、バアル、アシラ、アシタロテの神々は、それぞれ人間になぞらえられています、決して人格を持ったものではないからです。それらは自然界に働く力を擬人化したものにすぎません。古代では農作物の収穫や家畜の群れが財産でした。バアルは農耕の男性神で豊かな収穫をもたらし、アシタロテは畜産の女神で、家畜をふやしてくれると信じられていましたが、そうした神々は、必要以上の財産を積み重ねようとする人間の貪欲が形をとったものだったのです。聖書は「貪欲が偶像礼拝である」（コロサイ 3:5）と言っています。偶像の神々は、人間の欲望が生み出したもので、それ以上のも



のではないのです。それは、人を愛し、人を守り、人と関わりを持ってくださるまことの神とは全く違います。まことの神を知る者は、神ならぬ者を信じ、それを崇拝するなど、とうていできないのです。

信仰は、主なる神との人格的な関係です。ですから、それは人間の霊とたましいの中に深く根ざしているもので、決して外面的な儀式や慣習、活動で終わるものではありません。しかし、儀式や慣習は、外側の事柄とはいえながら、それが繰り返されると、人の内面を変える力を持っています。イスラエルは異教の神々の祭や偶像の儀式を繰り返すうちに、恵み深く、力ある神を忘れていきました。まことの神を偶像の神々と同じように考えるようになったのです。主が、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」とおっしゃり、まわりの国々の宗教の慣わしに従ってはいけないと言われたのは、それによって人々がまことの神から離れていくようになるからでした。そして、まことの神から離れていったイスラエルは滅びへの道を突き進んだのです。

### 三、イスラエルの回復

では、主はイスラエルが滅びに向かっていくのを黙って見ておられたのでしょうか。いいえ、主は、イスラエルに預言者を送り、何度も「立ち返って、滅びから救われよ」と語ってくださいました。列王記第二 17:13 に、「主はすべての預言者とすべての先見者を通して、イスラエルとユダとに次のように警告して仰せられた。『あなたがたは悪の道から立ち返れ。わたしがあなたがたの

先祖たちに命じ、また、わたしのしもべである預言者たちを通して、あなたがたに伝えた律法全体に従って、わたしの命令とおきてとを守れ』』とある通りです。アハブ王の時代にはエリヤ、ヨラム王の時代にはエリシャに、主は力あるわざを行わせ、神の言葉を語らせました。ヤラベアム二世とその後の時代にはヨナ、アモス、ホセアたちがイスラエルに遣わされています。

しかし、イスラエルは「これを聞き入れず、…彼らの先祖たちよりも、うなじのこわい者となった」（14）のです。人々は「…むなしいものに従って歩んだので、自分たちもむなしいものとなり」（15）しました。「むなしいもの」というのは偶像の神々のことです。彼らは偶像を何か実体のあるものであるかのようにして崇拜しましたが、実際は、空っぽなもの、「むなしいもの」でした。「むなしいもの」に従った人々は、その人たち自身が「むなしいもの」となり、その国は失われたのです。偶像は「忌むべきもの」とも呼ばれています。ホセアは、偶像礼拝者について、「彼らの愛している者と同じように、彼ら自身、忌むべきものとなった」（ホセア9:10）と言っています。人は自分が崇拜するものようになります。まことの神を礼拝する者は、真実なものとなり、幸いな人生を生きることができますが、神ならぬものを拝む人は、むなしい者となり、むなしい人生を送るようになるのです。

きょうの箇所は「イスラエルの滅亡」で終わっていますが、聖書を最後まで読むと、聖書が「イスラエルの回

復」も預言していて、それが成就していることが分かります。

先にイザヤ 43:1-4 を引用しましたが、それ続く 5-6 節にこう書かれています。「恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしは東から、あなたの子孫を来させ、西から、あなたを集める。わたしは、北に向かって『引き渡せ』と言ひ、南に向かって『引き止めるな』と言う。わたしの子らを遠くから来させ、わたしの娘らを地の果てから来させよ。」アッシリヤはサマリヤにいた人々を自分たちの国に連れていき、自分たちの国の人々をサマリヤに送り込んで、征服した土地を支配しました。イスラエルは遠い外国に散らされたのです。しかし、バビロンがアッシリアにかわり、ペルシャがバビロンにかわって中東世界を治めるようになったとき、イザヤの預言のとおり、イスラエルの人たちは帰国を許され、人々は再び自分たちの土地に戻ってきました。

また、アモスは「その日、わたしはダビデの倒れている仮庵を起し、その破れを繕ひ、その廃墟を復興し、昔の日のようにこれを立て直す」（アモス 9:11）と預言しました。この預言は「ダビデの子」として世に来られたイエス・キリストによって成就しました（使徒 15:16）。イエス・キリストは、ご自分を信じる者を神の民とし、信じる者たちの間に、愛と平和の王国、神の国を立ててくださったのです。

ホセア 1:10 にこうあります。「彼らは、『あなたがたはわたしの民ではない』と言われた所で、『あなたがた

は生ける神の子らだ』と言われるようになる。」この言葉は、ペテロ第一 2:10 に引用されていて、こう書かれています。「あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。」旧約の時代には、ユダヤ人でない人々は「異邦人」と呼ばれ、神から遠い者たちとして扱われてきました。しかし、新約の時代には、イスラエルの人々ばかりでなく、どの国の人であっても、イエス・キリストを信じる者はすべて「神の民」として受け入れられるようになったのです。イスラエルの回復は、イスラエルだけの回復で終わらず、異邦人の救い、全世界の人々の救いとなって成就したのです。

聖書に、愛は「すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」（コリント第一 13:7）とあります。神の愛は、じつに忍耐深い愛です。愛の神は決してイスラエルをあきらめず、「わたしに返れ」と呼びかけてこられました。「預言者を遣わしてもだめなら、わが子を遣わそう」と言って、主は、御子をこの世に送ってくださいました。そして、今、福音の言葉をもって、主は人々に呼びかけておられます。「わたしに返れ。そして、救われよ」と。私たちはこの愛の呼びかけにどう答えれば良いのでしょうか。ホセア 6:1-3 には、私たちが答えるべき言葉が用意されています。私たちもこの言葉の通りに、主の招きにお答えしたいと思います。

さあ、主に立ち返ろう。

主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、  
私たちが打ったが、また、包んでくださるからだ。

主は二日の後、私たちを生き返らせ、  
三日目に私たちを立ち上がらせる。

私たちは、御前に生きるのだ。

私たちは、知ろう。

主を知ることが切に追い求めよう。

主は暁の光のように、確かに現われ、  
大雨のように、私たちのところに来、  
後の雨のように、地を潤される。

### (祈り)

主なる神さま。あなたは、あなたに逆らい続けた人々にも「わたしはあなたを愛している」と語り、忍耐を尽くしてこられました。あなたは、その愛を、イエス・キリストによって残すところなく示してくださいました。今、心を開いて、あなたの愛を受け入れます。私たちがあなたの民とし、私たちの神となってください。そのことによって、私たちが、あなたの愛と救いを人々に知らせることができるようにしてください。イエス・キリストのお名前です。

# キリストの預言

## イザヤ 53:4-5

53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

### 一、喜びの預言

ソロモンの死後、イスラエルの国は北王国と南王国に分かれ、北王国は紀元前 722 年、アッシリアに滅ぼされました。その時、南王国ユダも滅亡の危機にあったのですが、そこから救われ、北王国よりも 160 年ほど長く保たれ、紀元前 586 年、バビロンに滅ぼされるまで続きました。北王国にはイスラエルの 10 部族がありましたが、南王国には 2 部族しかありませんでした。北王国に比べてはるかに小さい南王国が、北王国よりも長く保たれ、守られたのはなぜでしょうか。それは、軍事力や政治力、経済力によってではありませんでした。まことの神への信仰によってでした。ユダの人々が救われたのは預言者を通して語られた預言の言葉に聞き従ったからでした。

神は、北王国にも預言者を遣わし、神の言葉を与えておられました。しかし、王をはじめとし、北王国の人々は預言者の言葉を聞き入れず主の警告を無視したため早く滅びました。

しかし、南王国では王をはじめ、人々は神の言葉に聞き従いました。北王国が滅ぼされた時の南王国の王はヒゼキヤでした。彼の父アハズ王はエルサレムの神殿の扉を閉じ、いたるところに、周囲の国々の神々の祭壇を作りそれを拝みました。けれども、ヒゼキヤは王になったとき、まず神殿をきよめ、偶像の神々の祭壇を取り除き、神の言葉に従った礼拝を取り戻しました。南王国ユダの人々だけでなく、アッシリアに滅ぼされたばかりの北王国の人々にも呼びかけ、ソロモンの時代から長く途絶えていた過越の祭りをエルサレムで行いました。この時の様子を、聖書はこう伝えています。「こうして、ユダの全集団と祭司とレビ人、およびイスラエルから来た全集団、イスラエルの地から来た在留異国人、ユダに在住している者たちは、喜んだ。エルサレムには大きな喜びがあった。イスラエルの王、ダビデの子ソロモンの時代からこのかた、こうしたことはエルサレムになかった。それから、レビ人の祭司たちが立ち上がって民を祝福した。彼らの声は聞き届けられ、彼らの祈りは、主の聖なる御住まい、天に届いた。」（歴代誌第二 30:25-27）

歴代誌には「喜び」という言葉が使われています。想像してみてください。200年も分断されていた民族が、ひとつになって主を礼拝しているのです。それほど大きな喜びがあるでしょうか。人々が神の言葉に立ち返ったとき、そこに真実な悔い改めが生まれました。本当の赦しと和解が起こりました。そして、それが神の民をひとつに結びつけ、大きな喜びとなったのです。神の言葉が

この喜びをもたらしたと言ってよいでしょう。私たちがほんとうに御言葉に聞き従うなら、主はヒゼキヤの時代、ユダの国で起こったことを、今日も起こしてくださるでしょう。主は、民族の違いをもこえて、人々を一つにしてくださいます。私たちはそのことを信じて、神の言葉に聞き、御言葉に従っています。神の言葉だけが、そうした大きな喜びをもたらすことができるからです。

## 二、救いの預言

さて、サマリヤが陥落したころ、アッシリアではシャルマヌエセルに代わり、セナケリブが王となりました。彼は勢いに乗じて、ラブ・シャケという将軍に大軍を与え、エルサレムを取り囲ませました。将軍ラブ・シャケは南王国ユダに降伏を勧めてこう言いました。「ヒゼキヤは、『主がわれわれを救い出してください』とっているが、その言葉に、そそのかされるな。どの国の神がアッシリヤから救い出したのか。ハマテやアルパデの神々は今、どこにいるのか。セファルワイムの神々はどこにいるのか。イスラエルの神はサマリヤをわが軍から救い出したか。これらの国々のすべての神々のうち、だれが自分たちの国をアッシリアから救い出したか。主がエルサレムをわれわれから救い出すとでもいうのか。」  
(イザヤ 36:18-20)

これを聞いたヒゼキヤは預言者イザヤに使いを送り、神の言葉を求めました。イザヤを通して与えられた神の言葉はこうでした。「あなたが聞いたあのことば、アッシリヤの王の若い者たちがわたしを冒瀆したあのことば



を恐れるな。今、わたしは彼のうちに一つの霊を入れる。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国にひきあげる。わたしは、その国で彼を剣で倒す。」（イザヤ 37:6-7）この預言の通り、セナケリブは、彼の遠征中、クシュの王がアッシリアを攻めようとしているという噂を聞きました。それで、手早くエルサレムを陥とすため、なおもヒゼキヤに降伏を迫りました。その時、イザヤに神の言葉が臨みました。「アッシリヤの王は…もと来た道から引き返し、この町には入らない。…わたしはこの町を守って、これを救おう。わたしのために、わたしのしもべダビデのために。」（イザヤ 37:33-35）主は、この言葉をイザヤに与えると同時に、主の使いを、エルサレムを取り囲んでいたアッシリアの陣営に遣わし、アッシリヤの兵士十八万五千人を一夜のうちに倒してしまわれました。彼らは「主がエルサレムをわれわれから救い出すとでもいうのか」と言って主を侮りましたが、主は「わたしはこの町を守って、これを救う」と言われた通り、エルサレムを救われたのです。ラブ・シャケ將軍とセナケリブ王は戦いに負けてニネベに引き返しました。主に勝つことのできる者など誰もいないのです。セナケリブはニネベに帰ってから、そこで自分の子によって殺されてしまいました。「彼は…自分の国にひきあげる。わたしは、その国で彼を剣で倒す」という主の言葉はそのとおりに実現したのです。主の口から出た言葉は必ず実現します。それは神を冒瀆する者には裁きとなって実現しますが、神に頼るものには救いをもたらします。皆さんは

神の言葉から裁きを受け取りたいですか。それとも救い  
ですか。もちろん、救いでしょう。私たちは神の言葉に  
聞き従い、その救いを受け取る者でありたいと思いま  
す。

### 三、キリストの預言

今お話ししました南王国ユダのアッシリヤからの救い  
はイザヤ 36～39 章に書かれています。その 39 章には、ユ  
ダがやがてバビロンに滅ぼされるとの預言がありますが、  
イザヤ書はそれだけで終わらず、神の民の回復を預  
言しています。とくにイザヤ 40 章からは、そのことが  
詳しく記されています。主がアッシリヤの大軍を一夜に  
して滅ぼし、ユダを滅亡から救われたということだけで  
も、大きな出来事ですが、ユダがバビロンに滅ぼされる  
ことがあっても、再び回復するという、もっと大きな出  
来事が、イザヤ書には預言されているのです。そればか  
りではなく、イザヤ書には、新約の時代に成就するキリ  
ストについての預言があります。イザヤ書は全部で 66 章  
ありますが、これは聖書が 66 巻あることと呼応していま  
す。旧約が 39 巻あるように、イザヤ 1～39 章はイザヤ書  
の旧約の部です。新約が 27 巻あるように、イザヤ 40～66  
の 27 章はイザヤ書の新約の部です。イザヤ書は神の救い  
の計画全体に及ぶ、壮大な預言の書物なのです。

聖書で一番大切な預言は、キリストについての預言  
で、明確なキリストの預言は旧約の 40 箇所以上に見るこ  
とができますが、そのうちの多くは、イザヤ書にあります。  
たとえば、イザヤ 7:14 にはキリストが処女から生ま

れること、9:1-2にはキリストがガリラヤで宣教を始めること、9:7には、キリストがダビデの子孫として生まれ、いったん滅びたダビデ王朝が回復すること、40:3-5にはバプテスマのヨハネがキリストの先駆けとなること、50:6にはキリストが頬を打たれ、つばきをかけられ、その背を鞭打たれること、61:1-2にはキリストが嘆いている人々を慰めるお方であることなどが預言されています。

とくに、イザヤ 53 章には、まるでイザヤが 800 年後の十字架のイエスを実際に見たかのようにキリストの苦難が克明に預言されています。1 節の「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか」は、人々がイエスを信じなかったことを言っています（ヨハネ 12:37-38）。3 節の「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった」との言葉は、イエスがご自分の民から斥けられたことをさしています（ヨハネ 1:11、ルカ 23:18）。5 節の言葉、「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」は、イエスの苦しみと死が人の罪の身代わりであったことを言っています。（ローマ 5:6-8）。7 節の「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない」という言葉は、イエスが裁判のとき、ご自分に不

利な偽りの証言によって責められても、沈黙を守っておられたことをさしています（マルコ 15:4-5）。9節の「彼は富む者とともに葬られた」というのは、イエスの遺体が、アリマタヤのヨセフという裕福な人の墓に収められたことによって成就しています（マタイ 27:57-60）。12節の「そむいた人たちとともに数えられた」という言葉はイエスが犯罪人と共に十字架につけられたことによって成就しています（マルコ 15:27-28）。

イエスの十字架の物語は、讚美歌にあるように、読むたび、聞くたびに感動を与えるものですが、その感動は、イエスがたとえ死ぬことがあってもご自分の信念を曲げなかったことや、ご自分を苦しめる者たちに対しても赦しの心をもって接したということだけで終わるものではありません。十字架が与える感動は、罪のない神の御子が、私たちの罪を背負って、私たちに代わって罪の刑罰を受け、私たちを罪から救ってくださったことにあるのです。新約聖書は「キリストは私たちの罪のために死なれた」（ローマ 4:25、コリント第一 15:3、ガラテヤ 1:4、ペテロ第一 3:18、ヨハネ第一 4:10）と教えていますが、私たちの救いにとって最も大切なことが、イザヤ 53章にはすでに預言されていたのです。

新約聖書、ペテロの手紙第一 2:22-25 にイエス・キリストの十字架よる救いが、次のように描かれています。「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさ

ばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」イザヤ 53 章はこの言葉とぴったり一致しています。聖書は、キリストが来られる何百年も前から、キリストによって世界中の誰もが、罪から救われることを預言しており、それは正確に成就しています。私たちは、こうした預言の成就ということからも、聖書が神の言葉であることを確信することができます。

神の言葉は私たちに喜びを与えてくれます。それは、私たちをさまざまな禍いから守り、救い出してくれます。そして、神の言葉は、救い主がどのようなお方であり、どのように私たちを救ってくださるかを教えてくれます。旧約時代の人々は、救い主について「預言」の形でしか知らされませんでした。新約時代の私たちは預言の成就を「福音」の言葉の中に見ています。ペテロ第一 1:10-11 にこうあります。「この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。」

イザヤは救い主のことを預言しながら、それが実際にはどのように成就するのかが分からず、そのことを探り知ろうとしました。そういう意味では、福音の時代に生きている私たちは、救い主について預言者イザヤよりも多くのことを知らされているのです。預言者たちが待ち望んだものを、私たちははっきりと見ることを許されているのです。それは、ほんとうに幸いなことです。そのことを感謝し、さらに主を知ることがを願い求め、御言葉を求めていきましょう。

### (祈り)

私たちに御言葉をくださる主なる神さま。あなたは、イスラエルやユダが滅亡に向かう暗い時代にも、預言の言葉によってあなたの民を導き、守り、救い主を示してくださいました。そして、今の時代には、福音によって救いと希望を与えてくださっています。このさいわいな時代に、私たちがさらに御言葉を確信し、それに信頼し、それを愛し、それに従うことができるよう助け、導いてください。救い主イエス・キリストのお名前です。

### 福音と日本文化 ③ 一あとがきにかえて

キリシタンの殉教では長崎の「二十六聖人」（1597年）が有名ですが、それから30数年後の1629年1月22日、米沢で上杉家の重臣、甘糟右衛門をはじめとして53名のキリシタンが処刑されています。

米沢の処刑場までは一里、一時間ぐらいの距離ですが、殉教する人たちがそこに着くのに、その日は4～5時間もかかりました。米沢の領民たちがみな、別れを告げるために出てきたからです。彼らは、それほど人々に慕われていました。刑場で処刑を執行する奉行がこう言いました。「皆の者、ここにおる人たちは、信仰のためにこのようなことになった。皆、この人たちに向かって土下座してくれ。」そしてこう続けました。「この人たちが何をして来たかは、われらが一番良く知っておる。らい患者を世話し、子どもや年寄りのために尽くし、米沢の領内で無くてならぬ人たちである。しかし、今、時代の流れはこの人たちがキリストを信じることを許さない。だが、われらにしてみれば、この人たちはまるで仏様みたいな人たちなのだ。だから、皆、土下座してくれ。」

為政者はキリシタンを嫌いましたが、民衆は、たとえ信仰は違っても、キリシタンを尊敬していました。信仰によって築かれた人格、そこから生まれた善行は誰も否定できなかつたからです。それで米沢の人々は自分たちのために死んでゆく人々に土下座して詫び、また感謝したのです。

私は、このように純粋な信仰を持った日本人を尊敬し、誇りに思います。

中尾フィリップ



**Penguin Club**  
[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)